

7世紀後半の古墳から陶枕の破片出土

群馬県・今井三騎堂遺跡

群馬県赤堀町と前橋市が接する多田山丘陵地の今井三騎堂^{さんきどう}遺跡^{とうちん}で、7世紀後半に築造されたとされる古墳から中国製と見られる唐三彩の陶枕の破片18個が出土した。唐三彩は、8世紀前半の奈良時代に遣唐使が寺院などに持ち込んだのが始まりとされ、これまでに全国40カ所で8世紀の寺院や官舎跡から出土しているが、7世紀後半の古墳からの出土例は今回が最初の事例となる。

今回陶枕の出土した古墳は、直径30メートルの小規模な円墳で、内部に横穴式石室がある。陶枕は石室の入口から数十センチ離れた前庭部において18個の破片で見つかった。白色粘土の上に花をかたどった宝相華文^{ほうそうげもん}と呼ばれる文様が、緑や茶、白の色薬^{ゆうやく}で描かれ、その上に釉薬^{ゆうやく}がかけられている。推定される陶枕全体の大きさは、縦9センチ、横10センチ、高さ5センチくらいとみられている。



(上記の写真は朝日新聞1999年5月16日朝刊第1面掲載のものを30%拡大したものです)